宗教新聞

発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net
©宗教新聞社 2023

購読料（税込）
1部 500円
半年 3,000円（〒共）
年間 6,000円（〒共）

〈社是〉
一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

総本山善通寺で「心と命のフォーラム」

養老孟司・三林京子氏らが「人生論」

香川県

「生きる作法・死ぬ作法」と題し毎秋、香川県善通寺市の総本山善通寺（菅智潤管長、法主）で開催している「心と命のフォーラム」の第15回が10月4日、菅智潤管長、解剖学者の養老孟司氏、女優の三林京子氏、浄土真宗本願寺派称讃寺住職の瑞田（たまだ）信弘師のメンバーで開催された。今回のテーマは、養老氏のPHP文庫の著書の題でもある「人生論」。約500人の聴衆は熱心に耳を傾けながら、生と死、生き方などについて2時間、思いをめぐらせた。

フォーラムの様子。左から菅智潤、三林京子、養老孟司、瑞田信弘の各氏＝10月3日、総本山善通寺

同書で養老氏は、人生で最大の未経験は「死」だとし、自らの人生を振り返りながら、死や自分、世間、学問、現代、日本人について語っている。

古代ローマで語られた「メメント・モリ（死を思え）」は「カルペ・ディエム（今を楽しめ）」との対句で、カルペ・ディエムは、紀元前1世紀頃の詩人ホラティウスの詩の一節で、「明日のことは信用せず、その日の花を摘め」の後半、つまり「短い人生で未来に希望を求めて生きるよりも、一日一日を充実させて生きていく方が賢明だ」という意味。仏教的に言えば「今を生きる」となる。

次にメメント・モリが語られたのは黒死病（ペスト）が大流行した14世紀中頃のヨーロッパで、「死を忘れるな」という警告として。同時に、美術では「死の勝利」がテーマになり、誰にでも平等に訪れる死によって、貧富や身分差が乗り越えられるとした。

養老氏が東大医学部を卒業しながら医師にならず、解剖学に進んだのは、インターン期間での手術で患者の血液型を間違えかけたのが原因で、「医学においては死んだ人間を扱う解剖学が最も確実なものだ」と考えたからだという。

弘法大師生誕1250年の記念事業が続いている善通寺管長の菅氏は、年初から釈迦の言葉を学び直しているとして、『スッタニパータ』（岩波文庫）から150章「あらゆる存在界に対する限りない慈しみの心を育みましょう。上にも下にも、そして周囲にも、邪魔をせず、敵意や恨みを持たずに」などを紹介した。そして、東京工業大学未来の人類研究センター長の伊藤亜紗教授が提唱する「漏れる利他」に触れ、「与える側」と「与えられる側」という二つの立場を際立たせる利他ではなく、自然に周りを幸せにするような利他を生きたいと語った。

香川に来たのは10年ぶりという三林氏は、朝ドラ「ブギウギ」で笠置シヅ子がモデルの主人公の祖母役（手袋会社の女主）を演じていて、本島と彼女が生まれた東かがわ市でロケをしたと自己紹介し、72歳になったが血圧が高いだけで至って健康、100歳まで元気にいるように思え、死は他人事のようだ、と笑顔で語った。三林氏の父は文楽の人形遣いで人間国宝の二世桐竹勘十郎で、弟も人形遣い。立って片手で人形を持ち続ける芸は女性にできないとして落語の桂米朝に弟子入りした。伝統芸能の暮らしから、日本人は生活が洋式になって丹田を忘れたのが不幸の原因だとし、丹田を意識した呼吸をし、大声で笑うよう、大きな笑い声を実演しながら語った。

養老氏は、1706年に日本人初の人体解剖を行った幕府の医官・山脇東洋を紹介。当時の医師たちは人体の内部が知りたくてたまらず、幕府がついに認めたことで実現し、日本近代医学の始まりとなったと語った。

ブータンの仏教的な空気が好きだという養老氏は、現代人が求めているのは宗教の教えや決まり事ではなく、宗教的な雰囲気ではないか、寺や墓地が多い鎌倉に暮らしてそう感じるし、京都や奈良に内外から多くの観光客が来るのもそのためだと思うとし、身の回りにそうした環境をつくることが大事だと語った。

灯

「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。『わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている』と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ローマ人への手紙８：35―39）

神の愛にとらえられた者を神から引き離すことはできない。創造主なる神が彼らと共にいるからだ。

永遠不変絶対唯一なる神・創造主は目に見えない無形の存在だが、愛に満ちた人、愛に満ちた家庭の中に臨在し、信仰者の生きた姿を通して顕現しうるもの。これを否定する者は、人の善意も家庭のぬくもりも、神の普遍の愛も信じられないのだろう。（I）

社説

空海と親鸞の日本仏教

今年は真言宗では空海生誕1250年だが、浄土真宗では親鸞生誕850年である。仏教の最後に現れた大乗仏教の最終ランナーが密教で、チベットと中国に伝わり、後者が空海を介して日本に届き、教義としてかつ社会的宗教として定着した。

空海の教えが広まるきっかけは、没後90年ほどで弘法大師の大師号を朝廷より授かったことで、以後、大師信仰として庶民にも浸透していく。そこで活躍したのが泉鏡花の小説にもある高野聖で、興味深いのは彼らは念仏を唱えながら弘法大師の功徳を説いたこと。

浄土真宗は信者数では日本で最大だが、南無阿弥陀仏を広めた第一の功労者は時宗の一遍だとされる。伊予の水軍、河野氏の生まれで、武家を継がず、浄土宗の教えに生きると決め、宇佐神宮の八幡信仰や熊野信仰も吸収しながら、遊行の途上で自然に生まれた「踊り念仏」が一世を風靡した。時宗は鎌倉仏教の最終ランナーで、密教と同じくそれまでのすべての教えを集約する役割があるのかもしれない。ちなみに、空海も一遍も四国の生まれである。

真言宗と浄土真宗

一般的に、釈迦の教えに最も近い日本仏教が禅宗で、最も遠いのが浄土真宗と言われる。しかし、釈迦の言葉を紐解くと、親鸞は釈迦と同じことを言っている。釈迦がいなくなった後、どう生きればいいのかと問く弟子に、釈迦は「自燈明、法燈明」と答えたという。暗闇に灯る明かりのように自分自身を頼み、宇宙の真理を頼りにせよとの意味。「私のように生きなさい」と言ったのではない。宗教の伝承に師弟関係は重要だが、師を絶対視すると、発展は止まる。発展し続けるのが宗教をはじめ人間の知的営みであることを、釈迦はよくわかっていたのであろう。

『歎異抄』によると、どうしても阿弥陀如来の救いが信じられないという弟子に親鸞は、「私もそうだ」と答えている。それは、自分で探求し、体験し、それぞれの境地にたどり着くしかないという宗教の基本に即した考えからであろう。

一方、師の法然になら騙されても構わない、というのも親鸞の偽らざる気持ちである。その二つの立場を行き来しながら、最終的には自分の生きる道を見いだすのが信仰であろう。明治以降の近代化を急ぐ日本で、とりわけ日露戦争後の「煩悶青年」の時代に、親鸞の教えが若者の心をとらえたのは、自我の確立と軌を一にしていたからである。

日本宗教史的に空海の役割を考えると、天皇の帰依を得て、後七日御修法（ごしちにちみしほ）のように仏教が朝廷の宗教儀礼に組み込まれたことが大きい。

空海が2年、滞在した当時の長安は世界一の国際都市で、交易を通じてキリスト教やイスラム教、ゾロアスター教などアジアの宗教が集まっていた。空海は、予期悲嘆のケア、死の受容への援助、死別後の悲嘆ケアで、医療者にとって患者と家族の両方が大事。生前に悲しみを表現しておく方が、死別後の悲嘆のプロセスがスムーズになる。医療者は、悲しみを表現できる場所と時間を提供することが大切で、患者の痛みは減らすが、死は近づいていることを情を込めて

シンポジウムで（左から）塩内美春さん、小川みさ子さん、柴田久美子会長

呪術で支えていたことから、空海は唐の政治にも詳しくなり、そこから日本での政治的振る舞いを考え、それが帰国後の政治とかかわる都の東寺と、修行の場としての高野山に結実した。

空海の帰国後、唐の皇帝武宗は道教に傾倒して仏教を迫害するようになり、密教は衰退してしまう。残った中国仏教は、山林に逃れ、自給自足しながら継承してきた禅宗と浄土宗で、密教は日本に渡ることで命脈を保ったのである。心の教えである宗教も、世俗に着地しないと社会に広まれない。

古代においては、皇帝や天皇の帰依を得るかどうかが決め手となる。中国での師・恵果の行動を思いながら、日本でどうすればいいか、都に帰るのが許される前に、空海は思慮したに違いない。呪術を求める皇帝に恵果も応じていたように、空海も同じ方法を取りながら、一方で普遍的な宗教としての真言密教の完成と修行の継続を確立しようとした。宗教にその両面が必要なことは、人間そのものがその両面を生きているからである。

「世間」に生きる

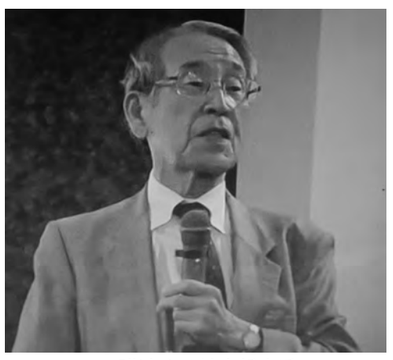
人類の中でホモ・サピエンスが繁栄したのは、社会を形成する能力が優れていたからだとされる。アランは『幸福論』で、人間の悩みはすべて人間関係の悩みだという。本当は協力し合わなければならない身近な人たちと、人はなぜか敵対しがちだ。それは、近いからこそあらわに見え、好悪の対象になるから。卑近のようだが、宗教の社会的役割として求められる第一は、それをどう解消するかであろう。

「漏れる利他」はそのヒントの一つ。個性を尊重しながら、個性が相乗効果を生むような関係の社会を築きたい。それが、西洋にはない日本の「世間」なのだろう。

第10回日本の看取りを考える全国フォーラム

ホスピス財団の柏木哲夫氏が講演

岡山市


講演する柏木哲夫氏

日本看取り学会（会長・渡部俊弘北海道文教大学学長）が主催する第10回日本の看取りを考える全国フォーラムが、岡山市内の会場とオンラインで開催された。㈱日本看取り士会・一般社団法人日本看取り士会（柴田久美子会長）との共催で、岡山県・岡山市・日本医師会・日本介護支援協会などが後援。淀川キリスト教病院理事長、大阪大学名誉教授、ホスピス財団理事長の柏木哲夫氏が基調講演し、看取り士などによるシンポジウムが行われた。

ホスピスなどでこれまで2500人を看取った柏木氏は「看取りからグリーフケアへ」と題し、次のように講演した。

家族ケアの三大要素は、予期悲嘆のケア、死の受容への援助、死別後の悲嘆ケアで、医療者にとって患者と家族の両方が大事。生前に悲しみを表現しておく方が、死別後の悲嘆のプロセスがスムーズになる。医療者は、悲しみを表現できる場所と時間を提供することが大切で、患者の痛みは減らすが、死は近づいていることを情を込めて話す必要がある。患者や家族が医師に聞きにくいときは看護師に聞いてもらい、病状については、できるだけ多くの家族に直接、エビデンスを示しながら説明する。

死別後の家族が一番つらいのは「悲しんではダメ」「頑張って」などと言われること。心を込めて悲しみに寄り添うようにしたい。そして、よかったと思えることを探すようにする。してはいけないのは、安易な励まし、無責任な助言、勝手な解釈、不適切な保証で、例えば「時間が解決してくれる」など。

効果的なのは遺族同士の自助グループに参加すること。悲しみや苦労を分かち合い、支え合う機会を得ることが回復への近道となる。

シンポジウム「あなたが考える愛されていると感じる旅立ちとは」では、看護師で看取り士になった岐阜県大垣市在住の小川みさ子さんが、初めての看取りでの体験を報告。80歳で一人暮らしの女性を娘さんの依頼で担当したところ、孫の大学生が「僕がおばあちゃんを看取りたい」と言い出し、看取りの作法を習って、かつて自分が生まれ、祖母に抱かれた部屋で看取ることに。ケーキやおかゆでなく大好きなご飯も食べ、最後には呼吸を合わせる孫に抱かれて旅立ったという。母の看取りを依頼した塩内美春さんは、「母の看取りを通して私たちの人生には意味があることを教えられ、息子も大きな影響を受けていました」と語っていた。

柴田会長は10年前、柏木先生に会った時、「どんな資格を持ってやっているの」と聞かれ、「看護師でも医師でもなく普通の主婦です」と答えるとびっくりされ、背中に手を添えてくださった思い出を語り、その柏木先生を10年後に講師に迎えたところ、「心を込めて頑張るんだよと背中を押したのですよ、と言われた」というエピソードを紹介。多くの人たちが幸せな最期を迎えられるよう活動を広げていきたい、と結んだ。

天地

仲間と6へクタールの田んぼで酒米を栽培している天地子は先日、地元の酒造会社の人たちと実った米の現地視察と意見交換会に参加した。コロナ禍で落ちていた需要が回復しており、酒米の注文も上方修正。田んぼを1割ほど減らした去年とは逆の展開となった▼国内での需要が頭打ちなのに対して、日本酒は海外で人気。県下の酒造会社の取り組みを聞くと、量はわずかだが着実に伸びているとして、インドからも注文があり、宗教上の問題はないのかと驚いたとの話もあった▼そこで出たのは、政府が日本酒や焼酎をユネスコの無形文化遺産の来年の登録に向けて準備しているという話。提案の理由は、こうじ菌を使う日本独特の酒文化であること。和食がユネスコの「食の無形文化遺産」に登録されたのは2013年で、実現すればそれに続く快挙となる▼インバウンドでは近年、日本人の日常の暮らしを体験するツアーが外国人に人気だという。地域おこしによそ者の視点が大事だとされるのは、ささやかすぎて気づかないことに、気づかせてくれるから。50前に母の介護で実家に帰った天地子も、18歳までには気づかなかった、都会での暮らしにはない良さを再発見した▼その一つは、自然が身近なこと。早朝の犬との散歩や農作業をしながら、自分の体と環境が溶け合っているのを感じる▼もう一つは、人間関係が密なこと。生活共同体なのでそうなのだが、一方、深まりがないのも現実。かつて介在していた宗教が衰退したからだろう。魂の充足にはそれを求めたいのだが、さて…

本紙定期購読のお申し込みは
■ご希望購読期間 ■氏名 ■郵便番号 ■住所 ■連絡先電話番号 ■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。
宗教新聞社
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2―4F
電話 03（3353）2940
FAX 03（5363）5182
e-mail:religion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料 年間6000円（税、郵送料を含む）

縄文のパワーフィールドへ
神道よ！今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ！
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり！
四六上製1785円(税込)
株式会社ヒカルランド
〒162−0821 東京都新宿区津久戸町 3-11
電話：03-6265-0852 FAX：03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp

日本宗教の闇
室生 忠著 四六判・520頁 定価：本体2,000円＋税
拉致監禁による強制棄教との戦い
信教の自由が保障された今の日本で、強制棄教を目的に拉致監禁が行われている。職業的強制改宗屋が家族を巻き込み、信者を拉致し、部屋に監禁して、脅迫的説得により棄教を迫る。特に世界平和統一家庭連合（統一教会）やエホバの証人の信者に被害者が多く、中には12年以上の監禁された人もいる。驚くべき宗教迫害のリポート。
アートヴィレッジ
受注センター
〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町3-3-18・4F
TEL 078(882)9305 FAX 078(801)0006

日本よ、蘇れ
日本神話の知恵
ゆがんだ歴史観、家庭の崩壊、教育の危機…。いま日本は大きな危機に瀕しています。この現状を打破するカギは、実は「日本神話＝古事記・神代」にあるのです。日本神話に満ちあふれる、愛と生命と知恵に立ち返ってこそ、日本の未来は拓けます。あなたも著者といっしょに、「神話の教え」をひもといてみませんか？
出雲井晶 著
●定価1000円（税込み）
●四六並製 232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社 販売企画部
〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み FAX:03-3578-3075

日本国始め 饒速日大神の東遷
大野七三 著
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して纒向の地に大和国を建国。その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が語る。足で調べた大和建国の謎。
（定価：本体2000円＋税）
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル102A
TEL 03-3813-6344 Fax 03-3813-8990

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
四六判87頁／本体価格500円
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

新刊！
人生の苦しみに積極的な意味はあるのか？
『21世紀に生きる日本人のための浄土思想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。
私の生命（いのち）の復活
上橋 泉 著
四六判296頁（本体1500円＋税）
日本人の宗教性（霊性）は回復するか？
株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15 ラ リュミエール1F
TEL 03-6657-9000 Fax 03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

第七刷り出版記念発売
植物霊物語
なぜ柳の木の下に幽霊がでるのか
樫の木を植えると金は残らない
財産を増やすにはカリンを植えろ
勝負に勝つには：勝栗のいわれ
クルミを手の中で握る理由は
酔ってクダまくコショウの木の霊
ガンの原因は植物霊の動き ――その他
近代文芸社刊
定価 1,000円 税込 送料無料
お問い合わせは下記へ
アシレス出版部
〒252-0202
相模原市中央区淵野辺本町2-17-14
TEL042(751)2558 FAX042(754)1818

JR中央線の死を招くホウの木のタタリ
〝これが本当の話しなら植物霊こそ殺人魔だ！〟
小冊子 A5判 10頁 一冊500円
三冊 1000円 税込 送料無料
アシレス出版部
〒252-0202
相模原市中央区淵野辺本町2-17-14
TEL 042(751)2558
FAX 042(754)1818